
自爆刑事

相坂夏々士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自爆刑事

【Nコード】

N8796H

【作者名】

相坂夏々士

【あらすじ】

伝説の刑事「軽部」。彼は同僚たちの間では「自爆刑事」として、数々の難事件を解決してきたという男。その伝説の男と、将来有望な大物新人刑事が「立てこもり事件」の偵察を命じられ、様子を見に行くお話。伝説の男が火を噴くお話でもある。

（前書き）

親友がお題を出して、それに俺がお話をつけるという企画から生まれました。気軽に読んでいただければな、と思います。

新米刑事、中島は額に大粒の汗を浮かべながら、自分より少し前をいく先輩刑事の背中を追っていた。

これから、人質を取って、港はずれの無人倉庫に立てこもる犯人に立ち向かうというのに、目の前を軽い足取りで進んでいく先輩刑事を見ていると、まるで数か月ぶりに彼女とデートでも行くかのようだ。中島は少し歩みのスピードを遅めて、跳ねている背中を見つめる。

なんと頼りになる背中なのだろう……。体格だけなら中島の方がずつと優れているし、強そうに見える。なのに、先輩刑事はどことなく淒味のあるオーラを醸し出していて、到底及ばないと思わせる迫力があつた。

先輩刑事の名前は軽部。通称・「自爆刑事」

そのあまりにも圧倒的で究極的な捜査力に現在の日本の警察の全てがおんぶに抱つこの状態であるというのは、その道の人間たちにとっては常識中の常識。警察という巨大組織に身を置く者であれば、誰もが彼を崇め、尊敬し、目指すという。

そんな彼に、中島もずつと憧れ、目標としてきていた。今回起こった立てこもり事件はようやく巡ってきたチャンスだと中島は信じている。そう、軽部が「自爆刑事」と呼ばれる所以を確認するチャンスだと……。

それほどまでに彼を慕う者が多いという事実の他に、その者たちのほとんどが彼の仕事ぶりを見たことがないという現実。その矛盾の先に「自爆刑事」伝説があると見た中島は高鳴る鼓動を抑えつつ、

憧れの対象との初仕事に挑んでいるのである。

「乗れ！」

軽部に言われるまま、助手席に乗り込む中島。軽部は運転するのが好きなようで、鼻歌まじりの上機嫌であった。

サイレンをかき鳴らしながら、街を疾走するのが楽しいのか、時速180キロで商店街のど真ん中を駆け抜けていった。

目的地である、港はずれの無人倉庫に車をぶつけて駐車すると、エンジンもかけっ放しで降車。軽部は一目散に入口へ向かって走り出した。中島も見失ってたまるかと、慌てて追いかけて行く。

「ここだ、新入り！ てめえ、この野郎め」

軽部が立ち止ったのは、何と恐らく犯人が立てこもっているであろう、倉庫の中。すでに侵入しているのだ。

大胆不敵！

（こ、こんな大胆な作戦をとるなんて……。しかし、犯人もまさかこんなに近くまで来ているとは思うまい。さすが伝説の自爆刑事）

「さあ、行くぞ、新入り！ てめえ、この野郎め」

「！」

勢いよくコートを脱ぎ棄てた軽部。そんな彼を見た中島は度肝を抜かれた。打ち抜かれた。

体中に捲かれたダイナマイトらしき筒状のもの、更に肩にはドでかい口ケットランチャーを担いでいる。それが一介の刑事が突入する

際の装備だろうか……。そもそも、二人が現場に来たのは偵察命令があつたからで、誰も人質を救出してこいと言われていたわけではなかつたのだが。暴走気味の軽部と、恍惚状態の中島にはどうでもよいことだつた。

とにかく広い倉庫ないには、いくつもの個室のようなものがあり、区切られていた。二人は手分けして、次々に扉を大胆に開けていった。扉を無遠慮に開閉する音がよく響いた。

ある部屋を開けたとき、中島は微かに聞こえる物音に気づき、壁に耳を近付けた。隣の部屋から男女の声が聞こえたのである。そのことを軽部に伝えると、

「新入り！ てめえこの野郎め、こいつをそこの壁に扉型に張り付ける。まあ大きさは……俺ら二人が入れるほどで頼むわ」

軽部は粘土のようなものを中島に手渡し、ニツと白い歯を見せた。それが一体何なのかわからないままに、中島は嬉々として言われた通りに壁に張り付けていく。

「出来たか、てめえ、この野郎。アブねえから下がってろ、てめえ、この野郎め」

中島が後ずさるような塩梅で下がると、

「ばっきやるーっ！ 死にてえのか！ バカ野郎」

人質を取って立てこもる犯人を無視するかのごとき大声で怒鳴つた。コンクリートの要塞のような倉庫中に響き渡る軽部の怒鳴り声。

「すみません！」

中島も負けじと腹から声を出して謝った。

次の瞬間だった。

中島の「すいません！」の声のコダマが消えるか消えないかというタイミングで、乾いた銃声の音。無論、中島も軽部も無傷。無事だ。

軽部は小さく舌打ちし、リモコンのようなものについているスイッチを押した。

すると、先ほど中島が壁にくっつけた粘土のようなものが爆発し、壁が崩れ去り、見事新たな扉が現れた。

その扉の向こうに見えたのは、煙を吐く銃を持って立っている男と、人質であろうと推測される中年女性。中年女性は一見、絶命しているように見えた。おそらく見えたのではなく、そうなのだろう。心臓を一発で打ち抜かれているのだから……。何よりも男が持っている銃が吐く煙と女性の胸から上がっている煙が証明している。

中島はふっと我に返り、ぶっ壊した壁の向こう側から差し込んでくる太陽の光に照らされた軽部の顔をのぞき見た。

（なんて事だ……）

中島は狼狽した。軽部の表情が憎しみに満ち、悔しさに歪んでいたからである。

「この外道がああっ！」

担いでいたロケットランチャーを男に向ける。今度は男が狼狽する番であった。

「ちょ、ちよつと待て！」

「問答無用！」

超至近距離。数字にして約5メートル弱。この距離からのロケットランチャーの発射が何を意味するか……。そして、ロケットランチャーを構えている軽部の体に複数捲かれているダイナマイトらしき筒状のもの……。

（そうか！　そういうことだったんだ）

中島はすべて悟った。

「うおおおおおおおっ」

怒り、憎しみ、悔しさ。その他諸々の感情全てに飲み込まれた軽部は、全身全霊の自身の正義を込め、引き金を引いた。

「新入り、てめえ、この野郎！　あの世で会おう！」

（ははは……この人は……）

見たこともないような閃光を放ちながら、ロケットランチャーが獣のように吠えはじめた。

（やっぱり……自爆刑事だったんだ）

熱を帯びた咆哮は、絶望的な威力を持った爆風に姿を変え、その場を跡形もなく吹き消した。

二週間後……。

「何？ 港のはずれの無人倉庫で立てこもり事件だと？ 人質は？」

伝説の自爆刑事こと、軽部は桁はずれの強運と人間離れた回復力で現場復帰。しかし、残念なことに中島刑事は二階級特進という結果になってしまった。

「何だと？ 隣町ではスクールバスがジャックされた？ 本当か？ 嘘じゃねえだろうな？ 何？ 本当だって？ ちくしょう、何と罪深き行為。おいっ、新入り！ てめえ、この野郎は俺についてくるか？ それともスクールバスジャック犯を追うか？ どうすんだ？ てめえ、この野郎」

急に声をかけられた新米刑事、高倉は、

「もちろん、先輩についていきますよ！」

天まで飛び上がるような勢いで立ち上がった。捜査一課のベテラン勢の表情が曇ったのに二人は気づかない。そのまま、凄い勢いで署を飛び出して行ってしまった。

捜査一課の一人が呟いた。

「おい、また二階級特進者が出るぞ。あと、人質、犯人消失決定だ」と。続いて、

「今月入って何人目？」

「たしか……四人？」

「いや、五人だ。安達に長谷川、吉岡、平田ときて中島だ。中島なんて凄い有望だったってのになぁ」

ベテラン勢がため息のハーモニーを奏でる。

伝説の「自爆刑事」の活躍ぶりを、彼に尊敬の念を持つ者たちの誰もが明確に知らないのは、真の活躍ぶりを知る者はすべからず、勇姿の目撃&二階級特進という勲章と引き換えに消えてしまっからであつた。

しかし、皮肉なことに二階級特進者が出れば出るほど、軽部の「自爆刑事」の名は上がり、ますます崇拜者を増加させる。

もつとも、その大惨事の中、常に生き残るような強い生命力を持つ不死身さは、伝説化するに値するものかもしれない。

人は彼を「自爆刑事」と呼ぶ。

彼は無意識に伝説的行動をとる。

故に今日も街に爆発音が響く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8796h/>

自爆刑事

2010年11月16日08時35分発行